

平成 21 年度第 1 回大学授業研究会の報告

FD 推進委員会
大学授業研究会

FD 推進委員会では昨年度に大学授業研究会を発足させ、各学科から推薦していただきました代表の先生方により授業実践事例報告と授業研究会を実施していただきました。それぞれの授業実践事例報告の中には工夫された授業展開がある一方で、授業を実施するにあたり種々の問題を抱えている状況などにも接することができました。その後の授業研究会では様々な角度からの質問やアドバイスもあり、学科を越えた授業に携わる教職員の共通の話題として発展し、授業に対する考え方や進め方など参考になることが多くありました。特に、“私語の問題”や“双方向の授業の重要性”などの話題もあり、FD の観点から個々の教員が改善しなければならない課題と共に、学科あるいは大学全体として対策を考えなければならない課題も生じてきました。

そこで、平成 21 年度の FD 推進委員会における主要な活動の一つとして、昨年度に実施しました大学授業研究会を継続し、本年度の重点目標を『私語のない、双方向の授業の創造的探求』と定め、「私語がない授業」、「双方向の授業」、「私語がない双方向の授業」および「特色ある授業」を主テーマにした大学授業研究会を実施することになりました。

平成 21 年度第 1 回大学授業研究会は、7 月 1 日（水）の合同教授会終了後にメディアホールにて開催されました（約 1 時間 25 分〔16:20～17:45〕）。教職員の参加数はおよそ 120 名でした。司会は FD 推進委員会の委員で食物栄養学科の松井が担当しました。はじめに FD 推進委員会の前原委員長が挨拶し、昨年度に実施した大学授業研究会の報告と本年度の重点目標『私語のない、双方向の授業の創造的探求』に至った経緯を述べました。

大学授業研究会は、まず、生活環境学科学科長の横川先生が家庭生活論・初期演習の授業を通じて、“私語のない双方向の授業”について話されました（別紙①）。

次に、FD 推進委員会のメンバーでもある英語文化学科の山田先生が国際関係論などの授業を通じた“私語のない授業”について話されました（別紙②）。

最後に、共通教育部長でもある濱谷先生が情報メディア論などをはじめ、長年の授業を通して経験し実践してこられた“授業で心がけていること”について話されました（別紙③）。

その後、意見交換会に移り、会場内の先生方から、多くの質問や意見などがあり、壇上の 3 人の先生方等が応答し、非常に活発で有意義な意見交換会を実施することができました（別紙④）。



第1回目の大学授業研究会は、昨年度の実績を踏まえて、各学科選出の先生方に話題提供をしていただきましたが、メディアホールの会場で多くの教職員と共に意見交換会を行うという点は、昨年度と規模的に大きく異なり、さらに、その後の予定等で終了時間が定められており、運営上、かなり苦しい状況でありました。スムーズに実施できない状況も予測され心配しておりましたが、会場に集まっていたいただいた教職員の皆様のご理解とご協力のおかげで、第1回目の大学授業研究会を無事終了させていただくことができました。ありがとうございました。

双方向授業と私語の撲滅—初期教育を通してものの見方や知的関心を活性化する—について事例報告。

生活環境学科の横川公子教授が、次の2科目について概略の説明を行った。

A. 家庭生活論 生活環境学科基礎・共通科目 入学後初期教育の一環として

B. 初期演習「本を読む楽しさ」（平成15年度生活環境学科1年C組）

A. 家庭生活論（大環1年ABC，専門基礎，平成21年度前期77名）

家庭生活論の内容紹介を通して双方向授業と私語の撲滅の可能性を考える→**講義内容によって知的な刺激を得、周囲や対象の見方に対する興味を活性化することを目指す。**

普通の暮らしとしての家庭生活を見直す。家庭生活についての先入観を捨てる。誰もが知っている普通の、ありふれた、変哲もない、従って退屈で、ありきたりな・・・ルーチン的な暮らしであるという思い込みや特徴を破り、知的関心を呼び覚ますことを目標とする。

I. 日常の暮らしの典型としての家庭生活は自明か？代表的な家庭の類型を探る。

映画「薔薇の名前」を見ることによって、模擬家庭としての中世修道院の生活を知る。自給自足と信仰の暮らしから生活の多様性を考える。印象に残ったこと、感想などをショートレポートにする（翌週の授業の初めで）。

学生からのショートレポートの例

- ・暮らしは国や地域によって違ってびっくりした。
- ・宗教が生活に深く関わっている。
- ・私たちは様々なルールに囲まれていて、一番優先するルールは何だろうかと深く考えさせられた。
- ・今とは全然違う生活
- ・少し見ただけでも今の私の周りとは違うので興味がわいた。これから家庭生活論や他の授業や私生活を通して、自分とは違う世界を知っていこうと思えた。
- ・フランシスコザビエルが生きていた時代の話だと考えると、日本では三斎市や楽市楽座、時代は同じでも国や地域で全然違ってびっくり。
- ・難解、完全に話が理解できていないので続きが見たい。

以上のように、**新しい世界を見たという感想が殆どであった。ショートレポートでは、周りの見方に関する興味や知的関心が触発されていると思われる記述を指摘して返却をおこなった。**

II. 暮らしの現場を知る —具体的に考える—

- ①モノを通して暮らしを考える
- ②ごみを通して暮らしを考える
- ③暮らしの行事を通して暮らしを考える

1) 以上の中で、モノを通して暮らしを考える。授業方法としては、配布資料とレポートの作成を課す。様々な配付資料（都市近郊の集合住宅、都区内の文化住宅、山村の伝統的民家）を見せ、**暮らしの中のモノの集積と機能分析から暮らしを再現するとどうなるか？**

チェックの視点は以下の項目である。

- ・自分の知っているモノは何か
- ・電化製品はどれか
- ・伝統的なモノはどれか、外来のモノはどれか

以上の項目チェックにより、モノが示唆する生活文化に注目するとともに、自分の暮らしへの関心を具体的に喚起する。

具体例として、小調査を実施する（身の回りを調査してみる）。「玄関周りのもの」小調査を実施（5月連休中）。調査レポートの作成と提出を課す。調査結果から以下の結果があげられた。

- ・30年前の玄関用品（フェイスシート）との比較で、電話が消えた
- ・玄関用品は殆ど西洋化
- ・飾りが増えている、飾りには和風がある
- ・下駄箱の上は、お母さんの趣味の展示場
- ・何気なく使っているものにすべて機能があって驚いた
- ・詳細な調査で見方が変わった　　・・・・

2) この科目の狙いと成果といえるものは以下の三点。

- ①調査とショートレポート、映画の感想文による現実の家庭生活への関心を喚起している。
- ②「自分」が見聞し、体験している家庭生活以外への視野の拡大と体験の相対化をおこなっている。
- ③配布資料や調査結果から、**具体的に**「自分」で答を引き出している。

3) 成果として、卒業研究としての結実が見て取れる。

- ・現在の台所事情—母と私の台所用品の違いから— (H20)
- ・チャノマの多様性—明治以降の住宅及び生活用品の調査を参考にして (H18)
- ・捨てたモノから生活を見直す (H15)
- ・一人暮らしの生活財にみるライフスタイル研究 (H13)
- ・民家の軒下とベランダの利用比較 (H13) 等々の卒業論文があげられる。

B. 初期演習「本を読む楽しさ」（平成15年度生活環境学科1年C組）

①「本を読む」は初期演習で2度目である。

河合隼雄による「読書合宿」（2003. 5. 17～18）を参照して行った。河合隼雄の趣旨は次の二点である。「本を一冊読むことは、一人の実際に生きた人と話し合いすることに似ている」ということ。もう一つは、「読書の楽しさを伝えるには、既存の読書感想文に変わる表現法が必要」であるということである。

②初期演習「本を読む楽しさ」のすすめ方

1) 各自、読みたい本を選び、夏休み中に読む

2) 後期になって

- ・読んだ本で気に入ったところを全員が抜書きする
- ・抜書きを声に出して読み上げる
- ・本を選んだ理由と気に入った理由などをいう
- ・コメントする+コメントをノートする・・話し合うきっかけにする
- ・授業の進行と共にノートを完成（抜書きと理由、他の人のコメント）
- ・小冊子作り（様式に従ってPCで打ち込み、原稿を完成、組本に仕立てる、印刷製本は業者に印刷・製本をお願いする）

3) まとめにかえて（学生からの感想）

初期演習の本読みリレーによって、本を読むことで自分自身が本の中にあるフレーズによって支えられたり、励まされたり、成長したり、ということがあって、新しい自分の世界が広がるものであることが分かった。読む本は同じでもひとによって捉え方、抜き出すフレーズがちがいで、自分が読んだことがある本でも、他の人の捉え方、それに対する考えを聞くことでさらに世界が広がった気がした。同じ方向を目指す学科内で様々な本が登場したのも面白かった。私は普段本を読まないのでもいい機会になったし、最近ネットからの情報をうけてばかりになっているが、「文章を読んで想像する」というのは、これからも大いに役立つと思う。だからこれからは、もっと読もうと思った。（Y.H.）

テーマ：「私語のない授業の実践例」

実施者：英文 山田慎人講師

科目名称：「国際関係論」等

- ① すべての授業で行う私語対策：私語に関する注意「大学の授業とは関心のあるものが参加する場。関心のあるものに私語は迷惑。授業アンケートではささいな私語にも苦情が来る」
⇒学ぶことの本来の意味を学生に伝えるために「ルールだから、先生に失礼だから」と言わない。
- ② 座席指定管理型：「TOEIC 演習関連科目」（「TOEIC 演習 I」、「検定英語演習」など）
 - A) 60～80名程度の大人数授業。しかし、私語は全くない。
 - B) ただし座席指定にしなくても私語はない。担当者によって効果に違い。
 - C) そもそも座席指定は私語対策ではない。自主性を殺し本来望ましくない。
- ③ 一番の私語対策は授業内容の改善。一つの方法は、学生が関心を持てる話をする事。
⇒一例としての「比較文化論 A」
 - A) ヨーロッパ諸国の国民性や芸術、文化全般の話（19年度）からヨーロッパの食文化の比較（20～21年度）にテーマを絞った。関心が高まり私語が消滅。
 - B) 文化の理解という融通のきく目的を持つ授業だから成功。（多様な切り口の可能性）あらかじめ教える内容が決まっている科目では難しい。
- ④ 「国際関係論」関連科目
（2年後期「国際関係論基礎」、3年前期「国際関係論 A」、3年後期「国際関係論 B」）
 - A) 最大の課題は、内容を薄めずに分かりやすくすること。教えている内容はトップの大学とかわらない。これをあえて学生に伝えてやる気を引き出す。その気になった学生の理解度は実際に高い。
 - B) 聞けば分かるが聞かないと分からず、試験も落ちることを理解させる。（実際に落とす。）
 - C) 双方向の取り組み。
 - 「囚人のジレンマ」のゲーム。
 - 学生に一国の政策決定者の立場に身を置かせ、特定の状況においてとることのできる選択肢を示し、自分ならどう行動するか考えさせて、手をあげさせる。
 - D) 昨年度後期の「国際関係論基礎」では繰り返し注意が必要。本年度前期の「国際関係論 A」では私語の問題はほとんどない。
 - E) 「国際関係論基礎」で特に問題となったのは全く学ぶことに関心を示さない一群の学生。関心がないのに授業に来て妨害する理由は二つ。第一に出席をとること、第二に甘い成績評価。
⇒学科レベル、大学レベルでの対策の必要性
 - 内容のある授業とまともな成績評価の必要性
 - 専門的な内容の授業で出席確認は必要ない？

テーマ：「私語のない、双方向授業の創造的探求」

実施者：共通教育部 濱谷英次教授

科目名称：「情報メディア論」等

対象クラス：大学、心理・社会福祉学科 3年 A,B,C,D

1. 報告の概要の説明

他の先生方とは切り口を変えて、特定の科目に限定するのではなく、私自身が日ごろ授業でこころがけていることについて話したい。

2. 報告

① 始めが肝心

- A) 授業に対するモラルという観点から、欠席よりもむしろ「遅刻」を重視している。
- B) 遅刻の扱いについては、30 以上遅れると欠席扱いにしている。
- C) 早退も同様の扱い。(60 分以上、授業に参加することが前提)
- D) 授業中の無断退室も欠席扱いにしている。(トイレの場合も声をかけていくことにしている。)→社会人になって、仕事を中断し、部屋を出たり入ったりすることは許されないこと。

② 出席確認

- A) 基本的には「点呼」式で行っている。＝授業での人間関係の構築のため。
- B) 60 名程度のクラスであれば、間違いなく点呼している。
- C) 学生がその場にいることを教員が認識していることを学生に周知させるため。
- D) 過去に実施した授業評価アンケートの中で、学生が「先生が顔を見ながら出席を取ってくれた」と書いてきたことへの対応でもある。

③ 「私語」する理由

- A) 昨今は、オーラルな私語に加え、フィンガーによる私語、すなわち携帯電話の使用もある。
- B) 私語は、初回授業からあるわけではない。授業が進む中で、私語が問題になってくるのが現状である。
- C) 私語が広がるには、私語をする「キーウーマン」がいるはず。私語の「震源地」ともいえる。その学生が誰なのか、見極める必要がある。学生の近くに行き、何をしゃべっているのか聞くことにしている。
- D) 私語にみえても、それが質問であったり、授業の内容の確認であったりする場合もある。それを私語と決めつけ、頭ごなしに注意すると、学生の学ぶ意欲を低下させてしまう恐れがあるので注意する必要がある。
- E) さらに、気をつけなければならないのは、彼女自身にしゃべる理由や事情がある可能性があるということ。教員側がそれらについて確認することによって、案外納得がいくことがあるかもしれない。そのような点には配慮が必要であると考えている。

④ 語らない学生

- A) 過去に実施した授業評価アンケートの中で、学生が「先生が近くまで来てくれた」と書いてきたことがある。最初はどうか解釈したらよいか分からなかったが、質問したくてもできない学生は、教員が近くに来てくれると質問し易くなるということを示していることが分かった。

- ⑤ 比較されることへの「おそれ」
- A) 学生の作品を（褒めるつもりで）実名で公表したら学生の間から大ブーイングだった。
 - B) 学生は他の学生と比較されることを非常に恐れている。褒められる方も周囲の友人と同じ立場でありたいという気持ちが強い。すなわち、一人だけ浮き上がりたくないという気持ちが強い。
- ⑥ 様々な手立て
- A) 素朴な質問や基本的な質問でも歓迎している。
 - B) 教卓から学生に対して質問の有無について問いかけても、なかなか質問してこない。
 - C) 質問しにくいというのが現状である。その点を考慮して、ワイヤレスマイクを使用するなどして、教室内を歩き、学生の近くまで行って質問の有無を確かめるようにしている。
 - D) 質問をクラス内で共有するように心がけている。（マイクを学生に手渡して質問させる、あるいは教員が質問内容をリポートするなど。）
 - E) 質問者に対しては褒めるようにしている。
 - F) アイコンタクトを非常に重要視しており、実践している。
 - G) 私語対策と双方向的な授業の展開のために、学生心理の理解と配慮、さらには授業での人間関係の構築を心がけている。←日々の失敗より学んでいるという方が妥当かもしれない。
- ⑦ 本学は「私語」問題への取り組みの先駆者
- A) 本学が私語対策に本格的に乗り出した時期は非常に早く、今後の議論でも参考にして欲しい。

私語問題への取り組みとして紹介された資料

島田博司(1990) 「調査報告：大学教師からみた私語の問題」、武庫川学院教育研究所編『研究レポート—特集 大学における私語の問題』、第4号。

— (1991) 「学生からみた私語の問題」、武庫川学院教育研究所編『研究レポート—特集 大学における私語の問題 II』、第6号。

新堀通也(1990) 「論考：私語研究序説」、武庫川学院教育研究所編『研究レポート—特集 大学における私語の問題』、第4号。

名古屋大学高等教育研究センター『成長するティップス先生』、URLの紹介。

(文責 共通教育部 西尾亜希子)

3人の先生方の報告後に行われました意見交換会での質疑応答の内容を以下に示します。

横川先生へ「感想文は実施された授業の翌週に授業中に書かせている理由は？（英文学科の竹島先生）」という質問があり、『1週間の間に調べる、考える、友達と議論するといったことが可能になるためです。』と答えられました。

横川先生へ「成績はどのように評価しているのか？（英文学科の竹島先生）」という質問があり、『提出したか否かで評価している。内容では評価していない。』と答えられました。

横川先生へ「宿題にして提出させることは考えないのか？（食物の石井先生）」という質問があり、『以前に宿題形式で実施したことはあるが、提出しなかったり、不ぞろいになることもあり、また、授業中という限られた時間の中で書くということにも意味があると考えて、授業中に感想文を書かせている。』と答えられました。

濱谷先生へ「良い作品であるということで、実名を出すことがなぜ良くなかったのか？（共通の西尾先生）」という質問があり、『私は褒めるつもりで実名を出したが、現在の学生の中には周りの友達から浮くことを嫌がる傾向がある。褒めることも慎重にしないといけないと思った。』と答えられました。

司会者から『私も実名を言うことに難しさを感じていましたので、提出された素晴らしいレポートを読み上げてから、“このレポートを書いた人！”といいます。そうすると、名前を言ってほしいと思っている学生は元気よく返事をします。で、“〇〇さん、よく頑張ったね!!”って、その場で褒めます。しかし、返事がない場合もあります。その場合は、その学生の方を見て、名前を言ってほしくなさそうにしていることを確かめて、、“素晴らしいですね。皆さんも、次回からはこんな感じで頑張ってください。”とまとめています。この方法で学生の意志もわかるし、良い方法だと思います。（食物の松井先生）』という意見がありました。

濱谷先生へ「携帯電話に関して、教室内で圏外になる機能をもつ装置をつけるという計画はどうなっているのか？（英文の笹部先生）」という質問があり、『物理的な方法で携帯の利用を防止できても、根本的なところでの解決にはならないなどのこともあり、装置はつけられないことになったと思う。』と答えられました。（その場で、情報教育センター長も肯定されました。）

糸魚川学長が3人の先生へ「最近、静かでない勉強できないという学生と授業中に私語をして楽しむという学生に分かれ、その傾向が大きくなっている。何か、学生同士で私語を注意しあうなど、いい考えがあれば教えてほしい。」という質問があり、『読書リレーの時は、聞こえにくいということで、学生がお互いに静かにするように注意し合っていたが、いい方法は思いつかない。（横川先生）』『授業アンケート等で学生から私語に関する事が書かれているにもかかわらず、学生へ私語に対して注意している先生が非常に少ないということも原因であると思う。ゼミなどで私語について話題にし、お互いに話し合うことで、私語に対して気をつけることになると思う。（山田先生）』『最初が肝心！最初から私語をする学生はいない。どこかで、何かをきっかけに、突然、私語が始まる。その時に、初期の段階でキーウーマンを見つけ、その根源を早くみつけ、対象の学生と早期に話をし、その事情によっては、授業改善に活かすとよい。授業中に私語をしているところへ行き、どういう内容かを聞くのも良いことで、授業に関係することで、質問的なことであれば、共通の質問として、マイクで話してもらうなどのこともして、授業に活かしている。関係のない私語に関しては、“他のところでしろ”と注意している。共通教育科目など多数の学生の場合は手ごわい。とにかく、早期に震源地を発見し、注意することだと思う。また、授業の最初に名札を書かせて、授業中に机の上におかせるとか、座席指定にするのも効果はあると思うが、難しい問題です。（濱谷先生）』と答えられました。

まだまだ、会場内には質問や意見をお持ちの教職員の方々がいらっしゃる雰囲気でしたが、その後の予定があるため、当初の予定を15分延長して大学授業研究会は授業に携わる教職員の方々の共通の思いとより良い授業を目指したいという姿勢があらわれた雰囲気が続く中で終了しました。大変、有意義な意見交換会であり、大学授業研究会であったと思います。